

しおさい なぎさ 潮彩の渚だより

国土交通省関東地方整備局
横浜港湾空港技術調査事務所発行
神奈川県横浜市神奈川区橋本町2-1-4
Tel.045-461-3892
発行/2021年2月26日
【復活版 第6号】
<https://www.pa.ktr.mlit.go.jp/yokohamagicho/>

潮彩の渚では次年度も環境学習の実施を予定しています。本号では今年度の環境学習実施状況および潮彩の渚で確認された生き物や水質調査結果についてお伝えします。

**** 今年度の環境学習 **** * * * * *
今年度は計5回の環境学習を実施しました。参加者一覧

●実施概要：東京湾、横浜の海岸線の現状や様々な利用状況、潮彩の渚や干潟の生き物について座学を行った後、安全のための注意事項を確認してから実際に潮彩の渚で生き物の観察を行いました。

石の下や隙間にいるカニやヤドカリ、砂の中に潜っている貝類など多数の生き物が確認されました。また、潮彩の渚で採取されたエビやカニ、ハゼなどの魚について名前を確認しながら観察を行いました。

実施日時	参加者	
2020年9月16日	神奈川小学校	4年生34名
2020年9月17日	神奈川小学校	4年生34名
2020年10月2日	幸ヶ谷小学校	4年生32名
2020年10月14日	幸ヶ谷小学校	4年生33名
2020年10月16日	幸ヶ谷小学校	4年生34名



実施状況（潮彩の渚観察）

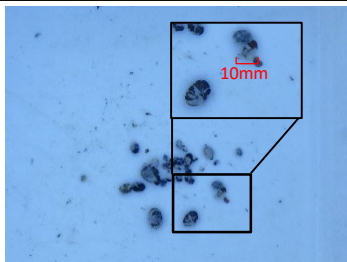





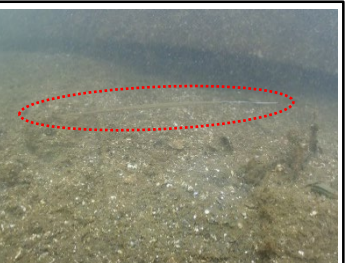
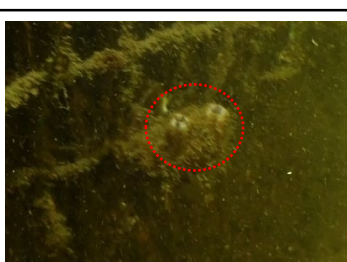
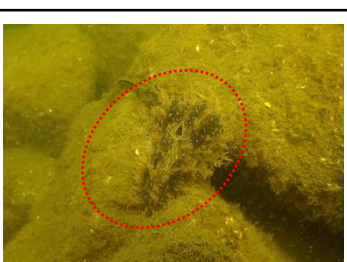
**** 事務所からのお知らせ **** * * * * *

●潮彩の渚における環境学習の実施をご検討の場合は、本事務所までお問合せください。

[問い合わせ先] TEL：045-461-3892 E-mail：info-y83ab@mlit.go.jp

10月～2月に見られた生き物

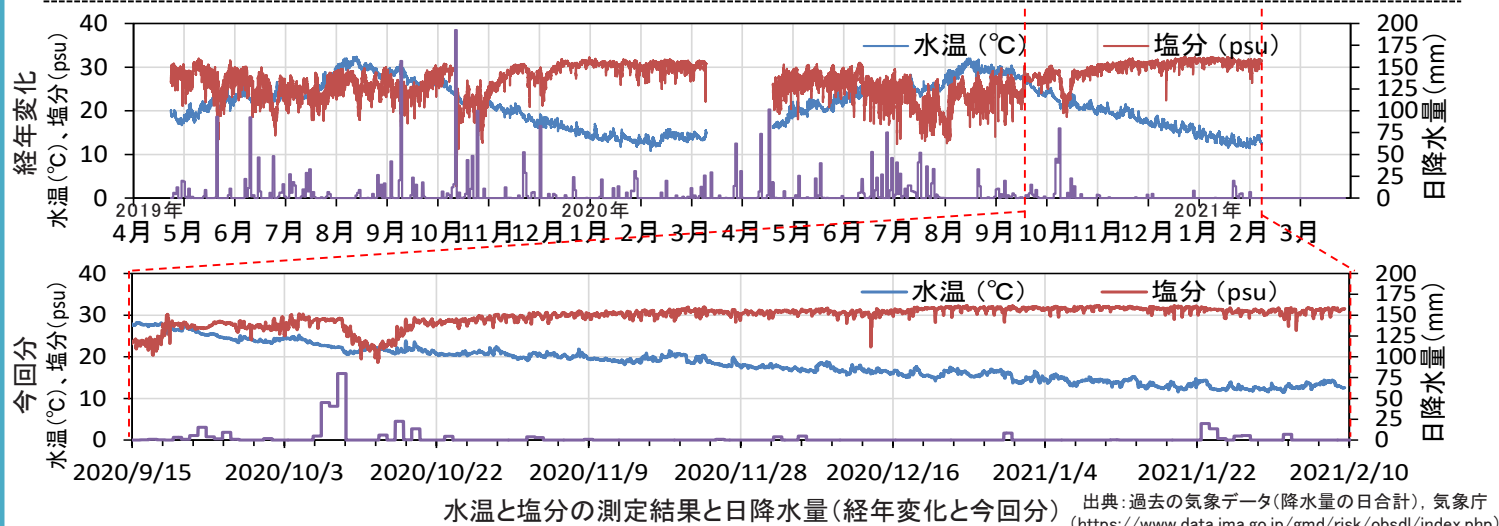
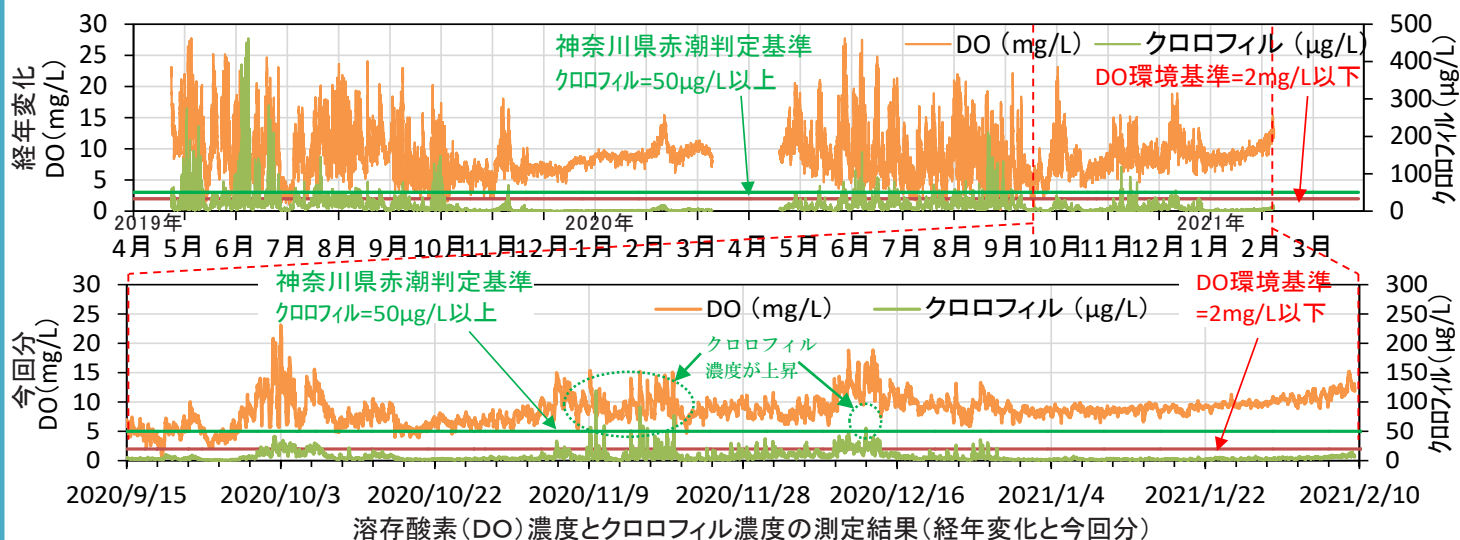
10月～2月の調査では、底生生物・魚類の様々な生物（キチヌ、クロダイ、ハゼ、貝類等）が確認されました。アサリは10mm前後の稚貝が多くを占めますが、3mm～4mm程度の非常に小さなアサリも多く確認されたことから、多数のアサリが加入していることが確認されました。11月から2月にかけても新規に加入していることが確認されています。

			
アサリ	キチヌ	クロダイ	アカオビシマハゼ
			
ニクハゼ	クロガネイソギンチャク	アカニシ	ヤガラ
		<p>今月のいきもの：キンクロハジロ（写真：裏面参照）</p> <p>【特徴】オスは、目が金色（キン）で、体の羽は黒色（クロ）、風切羽は白色（ハジロ）であり、名前の由来となっています。</p> <p>【生態】水の上に浮いている様子がよく見られますが、餌を採る時には水中へ潜水してアサリなどの貝を丸呑みして食べます。</p> <p>【生息域】キンクロハジロは冬鳥であり、夏の繁殖期にはシベリアやヨーロッパ北部などの寒冷地で過ごし、冬には越冬のために南下して暖かい地域で過ごします。国内では本州～九州のほぼ全土で飛来を確認することができ、湖や川などの淡水域や干潟、汽水域に生息しています。</p>	
シロバヤ	フレリトゲアメフラシ		

10月～2月に見られた生き物抜粋

「潮彩の渚」水質調査結果(9/15~2/9)

- ・潮彩の渚に水質計を設置して、水質を継続的に測定しています。本号では9月15日から2月9日の結果を示します。
- ・植物プランクトン量を確認できるクロロフィル濃度は、赤潮判定基準の一つになっています。クロロフィル濃度が基準値の50 $\mu\text{g/L}$ を超えた日は、148日中8日で、最大値は118 $\mu\text{g/L}$ でした。10月以降は低下し、1月以降は基準値を超えた日はありません。昨年と同じ期間では、クロロフィル濃度が基準値の50 $\mu\text{g/L}$ を超えた日は、148日中8日で、最大値は147 $\mu\text{g/L}$ でした。昨年と比較すると、今年はクロロフィル濃度が昨年と同程度で推移している傾向がみられます。
- ・海水中の溶存酸素(DO)濃度が低下すると、魚や貝など様々な生物に悪影響を及ぼします。溶存酸素(DO)濃度が環境基準の2mg/Lを下回った日(貧酸素状態)は、148日中1日で、最小値は0.6mg/Lでした。10月以降は基準値を下回った日は無く、貧酸素状態は発生していません。昨年と同じ期間では、溶存酸素(DO)濃度が環境基準の2mg/Lを下回った日(貧酸素状態)は、148日中4日で、最小値は1.5mg/Lでした。昨年と比較すると、今年は溶存酸素(DO)濃度が昨年と同程度で推移している傾向がみられます。



コラム:冬の干潟の生態系

- ・干潟では、春には潮干狩りでアサリを採ることができ、夏から秋にかけては様々な種類のカニ類や貝類等の生き物を見ることができ、生き物が多くいる様子が目に見えて確認できます。一方で、冬の干潟は、多くの生物が冬眠するなどして目に見える生物の種数が少なくなり、見た目にも寂しくなる季節です。しかし、実際には冬の干潟も様々な生き物が活動しています。
- ・特徴的なのは、冬鳥の飛来です。冬鳥とは、夏に北の寒冷地で繁殖し、秋頃から越冬のためにより暖かい地域に飛来する渡り鳥で、干潟ではカモ科やシギ科の一種などが見られます。冬鳥は干潟を主に餌場として利用し、ゴカイやカニ類、貝類、藻類などを食べながら、厳しい寒さ乗り越えます。
- ・潮彩の渚では、冬鳥であるキンクロハジロの飛来が確認されています。キンクロハジロはカモ科の鳥で、主にアサリなどの二枚貝を食べます。
- ・過去に潮彩の渚のキンクロハジロによるアサリの摂餌量を推計したところ、1冬の間に200kg程度のアサリを食べている可能性があることが分かっています。
- ・冬鳥にとってのマルシェと言えるかもしれません。

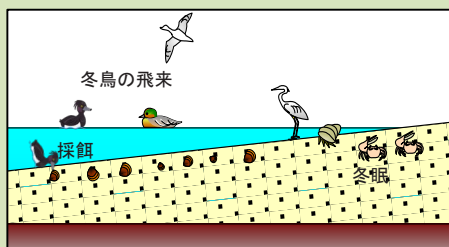


図 冬の干潟



写真 キンクロハジロ